

4.2区12号住居出土巴形銅器について

荒砥前田 遺跡2区12号住居から、巴形銅器が出土した。出土した巴形銅器は脚部の端部破片で、北東部支柱穴P2の東側床面直上で出土した。

この巴形銅器脚破片は、最大長3.1cm、最大幅1.7cm、厚さ0.1cmの破片で、灰オリーブ色(7.5Y5/2)あるいはオリーブ灰色(10Y5/2)である。先端部を中心に褐色(7.5YR4/4)の錆が表出している。表裏面とも平滑で全体として磨かれた可能性が考えられる。裏面には筋状の細かな凹凸があるが、その凸部の表面は滑らかで磨かれたと推定される。破断面の左端にも磨面があり、折られた後磨いた可能性も残る。裏面中央には幅1mmほどの凸線が鋳出されている。

群馬県内ではもう1点高崎市新保遺跡で巴形銅器脚破片が出土している。この破片は長さ4.8cm、幅1.7cm、厚さ0.17cmで、折断された端に2個の小穿孔があり、垂飾に転用されたと考えられている。これの表裏面および折断面も磨かれている。新保遺跡出土巴形銅器には裏面の凸線がなく、脚端部の彎曲も荒砥前田 遺跡巴形銅器より緩やかであり、形態上の差異が認められる。同一個体の破片ではないことは明らかであるが、いずれの破片も良く磨かれており、破片として重用されていたと判断される。

県内2例目の巴形銅器を報告するにあたり、愛知県埋蔵文化財調査センターの赤塚次郎氏に下記のようなご教授をいただいた。

「型式および時期について

本資料は脚部の破片資料であるが、大型であること、脚の形状が類似すること、裏面中央に細い凸線があること等から、赤塚氏分類による「上平型」にあたる。「上平型」は古墳時代初頭に東日本に分布する巴形銅器に付した型式で、長野県上田市上平遺跡出土の巴形銅器を標式とする。上平遺跡出土巴形銅器は上田市立信濃国分寺資料館に寄託された個人所蔵の遺物で、出土状況の詳細は不明である。

上平型は、広脚系 - 截頭円錐形座 - 屈曲棒状鈕の組合せで分類され、2世紀末から3世紀(廻間 式

後半～ 式初頭)に編年されている。この型式の巴形銅器の分布は、長野県から北関東にかけての地域に今のところ限られており、「東国で編み出された新型式の銅器」と考えている。同じ時期に西日本に分布する半球形座の五村型(滋賀県五村遺跡等)と融合して、「古墳前期巴形銅器」である円錐形座巴形銅器がみだされた可能性が高い。

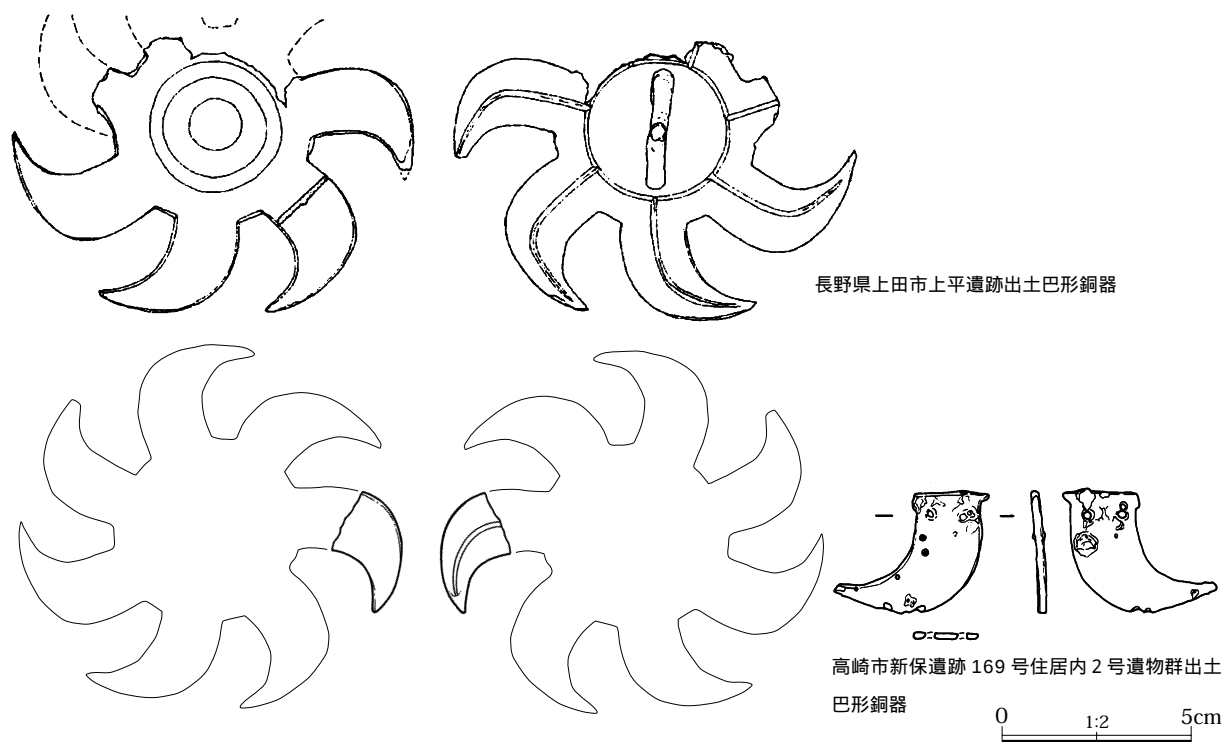
資料の形状について

破片の外表面は平滑で、磨かれた可能性が考えられる。破断面の左端にも磨面があり、折られた後、磨いた可能性も残る。高崎市新保遺跡出土例のように全面が磨かれているものではない。大きさは上平遺跡出土のものと酷似しており、大きさが一致するならば、接合する可能性もあるのではないか。」

そこで、上田市立信濃国分寺資料館の倉澤正幸氏に依頼して、資料館に寄託されている上平遺跡出土巴形銅器との比較調査を実施させていただいた。

上平遺跡出土の巴形銅器は、最大直径が9.8cmとされる大型の巴形銅器で、7枚の脚のうち3枚が欠損している。欠損部の他に2カ所の脚に折断があり、現状では接合されていた。全体に錆があり、黒光りしている。脚の部分は緩やかな彎曲でなく、実測図の印象の通り縁辺で大きく屈曲する。脚の先端は鋭くなっているところとやや丸くなっているところがあり、一定でない。全体としては鋭い印象を受けた。座の外形は截頭円錐形で3つの段があり、稜が丸くなるほど磨かれている。座の内形は半球形で、屈曲した棒状鈕が付されているのが特徴である。表面は座および脚部分とも光沢がみえるほど磨かれているが、裏面は筋状のざらざらがあり、鋳上がりそのままの状態のように感じられた。脚裏面中央にある凸線は実測図より細い印象で、脚の先端まで伸びていた。破断面の形状は細かな凹凸が著しく、ぱきと割れたような形状ではなかった。

荒砥前田 遺跡出土の巴形銅器破片は灰オリーブ色で、一見して黒緑色をしている上平遺跡出土巴形銅器とは、外観は大きく異なってみえた。大きさは、上平遺跡出土巴形銅器との図上の比較では酷似して



第246図 荒砥前田 遺跡2区12号住居出土土巴形銅器の復元

いると見ていたが、実際に脚の彎曲等を比較すると、若干荒砥前田 遺跡出土土巴形銅器の方が小さいと思われた。裏面の凸線は両者とも太さは同じで、感じはよく似ている。ただし、上平遺跡出土土巴形銅器が脚の尖端まで凸線があるのに対して、荒砥前田 遺跡出土土巴形銅器は、5 mm ほど内側で収束している。破片の厚さは荒砥前田 遺跡出土土巴形銅器の方が薄い。実測図で確認している段階では破片形状の類似から接合の可能性を考えていたが、実際の遺物観察によって、接合を確認することはできなかった。

このような調査と併行して、材料銅の鉛同位体比測定と産地推定を、別府大学文化財研究所平尾良光教授に委託しておこなった。分析試料は、全体形状を保持することを最優先にして、裏面中央の平滑面の一部を削って採取した。

分析の結果は第9章 - 7の報告に詳しいが、荒砥前田 遺跡出土の土巴形銅器破片の鉛同位体比の値は、朝鮮半島産材料の領域に分布することが判明した。高崎市新保遺跡出土土巴形銅器は、平尾教授によって1996(平成8)年に甘楽町天引狐崎遺跡出土の銅

製釧等とともに分析・報告されており、その鉛同位体比の値は華北産材料の領域と華南産材料の領域の間に位置した。この結果を平尾教授は、両領域の材料が混合したか、より近い華北産材料を利用したかの両方の可能性が考えられるとした。材料の面でも、来歴の異なる別の2点の土巴形銅器が群馬県内に存在したことが明らかになった。土巴形銅器の分析例は東日本ではまだ少ないと聞く。今回の分析値も対比して結論がだせる状況ではない。材料の推定産地と青銅器の製作地は即一致することではないが、分析値の集積と製作地の解明が待たれるところである。

群馬県で出土した2点の土巴形銅器脚破片は、ともに切断した後に磨かれており、新保遺跡出土例は垂飾に加工されている。土巴形銅器の用途は明確ではないが、本来の使用法とは異なってもなお、重用された貴重品であったことは間違いない。そのような遺物が一般農耕集落の住居から出土したことの背景を明らかにすることは困難であったが、この報告を今後に向けた資料提示とすることはできたと思う。